

素顔の

木漆工とけし (木漆作家)

高温多湿の沖縄の気候が漆の乾燥に最適であったことから、その技術は琉球王国の時代より受け継がれてきた。繊細な技術と美しい細工の漆器は食卓に花を添えるものの、なかなか普段の食卓で目にする機会は少ない。漆の器の魅力を多くの人に知ってほしいと制作活動を続けているのが「木漆工とけし」だ。



もくしっこうとけし
 写真右=渡慶次弘幸(とけしひろゆき)1980年生まれ、浦添市出身。2001年、沖縄県工芸指導所木工課を卒業後、石川県輪島市にて桐本木工所に弟子入り。2007年に年季明けし、2008年に愛さんと結婚。2010年桐本木工所を退職。写真左=渡慶次愛(とけしあい)1979年生まれ、浦添市出身。2002年沖縄県工芸指導所漆課卒業後、石川県輪島市にて福田敏雄氏の元で弟子入りし、福田氏及び、赤木明登氏の両工房にて勤める。2009年、両工房を退職。2010年、夫婦で沖縄へ戻り「木漆工とけし」を構える。

沖縄の食卓に似合う食器 普段使いで知る漆の器の魅力

「漆器というと朱と黒のコントラストが特徴的なイメージがありますが、「木漆工とけし」の器は落ち着いた雰囲気のものが多いですね。

弘幸 そうですね。僕たちは漆器で有名な輪島で修行していたので、皆さんがイメージする輪島塗のような伝統的な漆器にもとても魅力を感じています。沖縄でも琉球王国の時代から漆器づくりが盛んでしたが、今では仏具での漆塗りや、結婚式や結納など特別な席での食器として使われるのが主。手入れが大変とか、高価であるというイメージが先行して、なかなか漆器を普段使いできずにいます。輪島から沖縄に戻り、自分たちの制作活動を始めようとした時、僕らにできることは漆の器の魅力を多くの人に知ってもらうことなのではないかと、普段の食卓で使っても違和感を感じさせない色合い、デザイン、手触りを模索しました。

愛 沖縄は特にアメリカ文化が色濃く浸透していることもあり、和食以外にパンや、パスタなど色々な食材が食卓に並びますよね。これま

では漆器にパンを盛りつけるというイメージはなかったかもしれませんが、私たちの家では自分たちが作った漆の器に、パンやパスタ、サラダなど、カフェのようにワンプレートで少しずついろんな食材を乗せてみたり、お客様がいらしたときには茶菓子を乗せてみたりとさまざまなシーンで活用しています。

「普段使いができることを目的としているので、落ち着いた色合いが多いですね。」

弘幸 そうですね。普段の食卓では、メインはお皿ではなく料理そのもの。そこで料理がおいしそうに見える色合いや風合いになるよう工夫しています。

愛 漆塗りにはさまざまな工程があるのですが、どのような仕上がりにしたいかによって、それに応じた工程を組み合わせています。「センダンの器シリーズ」では木の感触が感じられるような風合いに、一方スプーンは手に持ったときの気持ちよさ、口に入れた時の感触を考え、なめらかな仕上がりにしています。食器



木は伐採され、木材となった後も縮みやゆがみが生じる。完成後に狂いが生じるのを最小限に抑えるため、長年の経験と勘を働かせて設計する(写真左)。「木漆工とけし」の漆の器。へらのように見えるのは、スプーン。つるんとした口当たりのよさが特徴。(写真右)



の用途に合わせ、色合いや風合いを吟味し、なんども試行錯誤を繰り返すことで「木漆工とけし」の食器が作られています。

「制作の裏側には並々ならぬ手間があるのですね。ほかにも制作活動の一環として心掛けていることはありますか？」

弘幸 僕は土着的なものや昔から愛され続けてきたものに愛着がわくタイプなのですが、そうした気に入ったものをなるべく身近に置くようにしています。なぜなら、直感的に気に入るものにはそう感じさせる理由があるから。身近に置くことで、このフォルムが気に入っていたんだ…とか、持ちやすくて機能的だから好きだ…など、使い手の目線で気づかされることが多い。僕らも作り手として、使い手に愛されるものを作りたいと思っているので、ミリ単位の厚さの違いや、フォルムなどにはかなりこだわりを持っています。とはいえ、こだわりが多過ぎると押し付けがましさは作品に表れてしまう。程よいバランスが大切ですね。

愛 ですから私たちが作った器を普段の生活で使用し、細かい改良点を見つけていくなど、使い手の気持ちになって見直すことも大切にしています。

「なるほど。使い手の目線も大切にされているんですね。」

弘幸 漆器は使い続けることで、程よい艶感が加わり、口当たりも一層よくなります。使い勝手の良さに加え、使うたびに愛着を増す器になるだけでなく、修理が可能なので長く愛用できるのも魅力です。「木漆工とけし」の器を通して、漆器の魅力を多くの方に知っていただきたいと思っています(取材・文 松崎紀子)

おうちの周辺

工房を備えた手作り住まい

木くずが大量に出る木工所と埃をきらう漆塗りの作業。加え、住まいとしてのプライベートスペースを確保するため、倉庫を借りて、住まいを手作りしている渡慶次さん。「騒音や木くずが出ることを考えると住宅地では難しく、倉庫に作業場と住まいを作るのが理想的だったんです。祖父の家を取り壊す際に、窓枠や扉などの建具をたくさん譲り受け、少しずつ住まいを完成させています。作業しながらなので、なかなか改築が進まないのですが、我が家が完成するのを見ていくのも楽しいもの」と弘幸さん。アイデア次第で改築ができる倉庫住まいを楽しんでいる様子がうかがえた。



木漆工とけし
<http://tokeshi.jp>

木漆工とけしの作品紹介のほか、普段の仕事風景や企画展の情報もホームページで確認できる。